

民族主義の倫理的—考察

—K・R・ポパーの民族問題に関する発言を手掛かりとして—

立 花 希 一

An Ethical Reflection on Nationalism
through Criticism of Popper's View
on the National Problems

KIICHI TACHIBANA

Abstract

Nationalism as well as liberalism and socialism is a main factor in modern politics. In his work "The Open Society and Its Enemies," which is his war effort against Nazism, K.R. Popper refers to the national problems including the Jewish problems and is totally opposed to nationalism in general. He is a cosmopolitan liberalist indeed. In this paper I critically examine Popper's view on nationalism and conclude that there can be a more liberal nationalism that Popper overlooks which is compatible with his more general philosophical position.

I. はじめに

私は1980年8月から1983年7月までの3年間、イスラエルに滞在した。その間の研究テーマは、今世紀最大の哲学者の1人と目される K.R. ポパーの「批判的合理主義」の思想を研究することであった。その研究を進めていく中で、ポパーが自らの思想を形成していくうえで、民族主義が大きな役割を果たしていることに気付くようになった。

本稿は、コスモポリタンの自由主義者であるポパーの民族主義に関する見解を批判的に検討することによって、彼の看過した民族主義を指摘し、さらに健全な民族主義の行方を考察したものである。

II. ポパーとヒトラー

「民族主義」が現代の政治を動かしている大きな要因の1つであることには恐らく異論はないであろう。この他の要因として、「自由主義」、「社会主義」が考えられる。それぞれの設定する目的、価値は、「民族」⁽¹⁾、「自由」、「平等」という具合に異なっており、この3つの価値のどれを第一義的なものとみなすか、優先順位をどうつけるかによって各人の政治的態度はかなりの程度決定されるであろう。しかし、ここでは主として「自由」と「民族」の2つの価値をめぐって考察することにした⁽²⁾。

先程、ポパーの思想形成に民族主義が大きな役割を果たしたと述べたが、それは「民族主義」がネガティブな意味をもって影響したということである。すなわち、ポパーにとって、「民族」は優先順位が低いというよりむしろ全く価値をもっていないのであり、「平等」を別とすれば、「自由」のみが価値を持っているということである。このことを、ポパーとは全く対照的に、「民族」

のみに価値があるとみなし、他の価値を顧みないヒトラーと対比させながら具体的に考察してみたい。

ポパーは、『開かれた社会とその敵』および『歴史法則主義の貧困』の執筆動機を次のように語っている⁽³⁾。

1938年3月に、ヒトラーのオーストリア占領のニュースが入った。今やオーストリア人の脱出を助けることが緊急の必要事であった。かくなるうへは、政治問題について私が1919年このかた得たどんな知識も、もはや公表せずに控えておくことはできない、と私は思いもした。…『貧困』と『開かれた社会』とは私の闘争の書であった。

それではポパーにとって、闘争——といっても思想闘争であるが——は、何に対する、あるいは誰に対する闘争だったのであろうか。『貧困』の開巻冒頭にある献辞——「ファシストとコミュニストの犠牲となった、…無数の男女への追憶にささげる」というもの——からわかるように、いわゆる左右の全体主義に対する批判、闘争だったのであるが、『開かれた社会』の第2巻の大半がマルクス及びマルクス主義批判にあてられているため、ヒトラーやファシズム⁽⁴⁾に対する批判の部分が見逃され、ポパーは反マルクス主義、反共主義、さらには反社会主義の哲学者とみなされがちである。しかし、ポパーがオーストリア社会民主党——オーストロ・マルクス主義と呼ばれるマルクス主義を標榜していた政党——に反対する最大の理由の1つが、社会民主党がナチスの権力掌握に対して徹底的に抵抗しなかった点にあった⁽⁵⁾ということからわかるように、ポパーにとって最大の敵は、マルクス主義ではなく、ファシズムだったのである。

ファシズムは、ユダヤ人を「スケープゴート」に仕立て上げ、反ユダヤ主義の政策を実行した。ユダヤ人と共に生活したことのないわれわれ日本人には、西欧——ばかりではなくユダヤ人の居住していたあらゆる地域——において、「ユダヤ人問題」がいかに歴史的に大きな問題——宗教的、民族的、文化的、社会的、政治的、経済的問題——であったかということを実感し、理解することは難しい。確かに反ユダヤ主義は非合理であり、馬鹿げたことである。しかし、19世紀末から20世紀半ばまで、いくつかの有力な政党が反ユダヤ主義を綱領の1つに掲げることによって、多くの票を獲得することができ、国内政治および国際関係に大きな影響を及ぼしてきたという事実は消し去ることができないのである⁽⁶⁾。

「民族主義」——反ユダヤ主義はアーリア人種至上主義的ドイツ民族主義の一帰結である——は、非合理ではあるが、この非合理的なものが現実政治を動かしたという事実を無視せず、その原因を解明しようとするところこそ合理的なアプローチといえるのではなかろうか。

現代の政治的反ユダヤ主義の発祥の地はウィーンであった、といわれている⁽⁷⁾。そこはキリスト教社会党のカール・ルエガー (Karl Lueger) と汎ドイツ党のゲオルク・フォン・シェーネラー (Georg von Schönerer) を生んだところであり、若きヒトラーは、ウィーンに滞在した時、この2人の政治理論家から政治的教訓を学んだのである⁽⁸⁾。

ヒトラーは、「ドイツ・オーストリアは、母国大ドイツに復帰しなければならない⁽⁹⁾」と『わが闘争』の最初に書いている。同じドイツ民族が、ドイツとオーストリアに分かれて住んでいることは、彼には理解できないことであり、許しがたいことだったのである。K・ローレンツ (K. Lorenz) の動物心理学に、「刻印づけ」(Imprinting) という理論がある。例えば、新たにかえったガチョウの子は、最初に眼についた動くものを自分の「母親」として選びとるが、それは修正のきかない学習過程である。ヒトラーにとって、「ドイツ民族は同一の国家に属すべきだ」という思い込みは、まさにそれだった⁽¹⁰⁾。ヒトラーにとって、単一民族国家の原理は修正や訂正の受けつけないもの

となっていたのである。

オーストリアをドイツに合併させることが、ヒトラーにとって最大の目的、課題となった。それ以降のあらゆる政治政策は、この目的を実現すること一本に絞られたのである。

ドイツ統一国家の夢はナポレオン戦争の時代にまで遡るが、その実現に向けて大きな成功を収めたのが、ビスマルクである。プロシアのビスマルクは、あらゆる政策を用いてドイツの統一を妨げるものを除くことによって、1871年、プロシアを中心とするドイツ帝国の統一を樹立した。しかし、これで夢が実現したわけではなかった。小ドイツ主義——オーストリア・ハンガリー帝国のドイツ民族圏をドイツ帝国に吸収しようとする考え——を奉ずるプロシアと、大ドイツ主義——ドイツ帝国を併合して、強大なハプスブルク帝国を実現しようとする考え——を奉ずるオーストリアの対立は、解決されないまま残っていた。

ビスマルクによるドイツ帝国の統一とその拡張政策によって、その後の西欧および世界の紛争のタネ——それは第1次、第2次世界大戦においてクライマックスを迎えるが——は播かれていたのである。ドイツ民族のさらなる統一を目ざし、第2次世界大戦を引き起こしたヒトラーは、ビスマルクによってプログラム化された機械人間とみなすこともできるかもしれない。目的やその目的を実現するための手段の良し悪しを批判的に検討することなく、インプットされたプログラムに従って、その目的を実現するための手段のみを考察することは計算機械にもできるからである。

そのヒトラーであるが、彼の心情、思想はポパーのそれと鮮かな対照をなしている。それらをいくつか対比してみることにしよう⁽¹¹⁾。

ヒトラー

〔第1次世界大戦〕

わが民族とその具体化されたドイツ帝国のためにはいつでも死ぬ覚悟があった。

〔ウィーン〕

多民族の都市ウィーンを嫌悪。

〔国家と個人〕

国家至上主義。単一民族国家が理想。

〔歴史観〕

歴史から学ぶということは、歴史的な事件を実際に引き起こした原因としての力を発見し、〔成功の道を見出す〕ことである。

〔政治形態〕

一党独裁、全体主義を標榜。

〔社会構造〕

画一的で権威主義的な社会。

〔大衆〕

大衆は支配するものをいっそう好み、自由

ポパー

オーストリアとドイツの信条は誤った信条であり、われわれは戦争に敗けて当然である。

リベラルでコスモポリタンのな雰囲気を受す。

国家は必要悪。個人の自由を保証し、保護するのが国家の役目。多民族の連邦国家が現実的な国家形態である。

自分のおかれた歴史的、社会的状況の中でより善いと思われる道を失敗を恐れずに選択すべきである。

複数政党主義、議会制民主主義を標榜。

多元的でリベラルな平等社会。

エリート、大衆の区別なく、われわれ人間

主義的な自由を是認するよりも、他の教説の並存を許容しない教説に内心いっそう満足を感じるものである。

〔言葉〕

人を説得しうるのは書かれた言葉よりも話された言葉によるものである。

〔音楽〕

R. ワーグナーの賛美者。

は自分の責任を他の者に肩代わりしてもらいたいという弱さを持っているが、それを克服し自分の行為の選択とそれに対する責任を負うのは自分だけだという自覚をもたなければならない。

言葉は人を説得するための道具ではなく、真理探究のための批判の道具である。批判的検討を行うには、話し言葉より書き言葉の方が望ましい。

ワーグナーは大嫌いである。

このようにいくつか例を挙げただけでも、ホバーとヒトラーが著しい対照をなしていることは容易にわかるであろう。ポパーの唱える政治哲学、政治形態は、ファシズムの抬頭を防ぎ、排除するために考案され、練り上げられたものとみなすことができる。例えば、民主制を多数決制としてではなく、流血なしに政権を交代しうる制度とみなし、もしその制度を破壊しようとするグループがたとえ多数派であったとしてもそれを許してはならないと考えていることは⁽¹²⁾、議会制民主主義を否定するナチスが、多数派工作によって政権を掌握してしまったことに対する歴史的反省から生まれたものと解釈することができよう。

ここまでではよくわかる。ヒトラー流の民族主義は悪である。しかし、民族主義はすべて良くないものなのであろうか。「自由主義」と「民族主義」は相互に矛盾し、一方をとれば自動的に他方を排除しなければならないものなのであろうか。

ところがポパーは断定する。「すべての民族主義または人種主義は悪であり、ユダヤ民族主義とてけて例外ではない」⁽¹³⁾と。ポパーのこの見解は誤っていると私は考える。一般に否定的な意味をもつ人種主義を民族主義と同列に並べることによって、民族主義一般をも否定しきるとするのは実に巧妙な論法ではあるが、合理的な批判とは呼びがたい代物である。端的に言って、「人種主義」と「民族主義」は別個の概念であるし、民族主義の一形態が悪だからといって、すべての民族主義が悪であるという結論を導くことはできないからである。

ポパーのあらゆる民族主義の否定は偏見であり、これはポパーが同化主義的ユダヤ人であることに拠るものと思われる。次節ではこのことを具体的に考察しながら、「個人の自由」と両立しうる、あるいは「個人の自由」を増大させようような「民族主義」のあり方を探ることにしよう。

III. ポパーの看過した民族主義

ポパーは、ドイツにおけるヒトラーの躍進、それに続くオーストリアの併合を予想し、このような事件が起きる前にオーストリアを去ろうと決心した⁽¹⁴⁾。もしウィーンを去っていなかったら、ポパーはユダヤ人⁽¹⁵⁾とみなされ、ヒトラーによって虐殺されていたであろう。このポパーの予想に基づく決断が彼の生命を救ったのである。

それでは、ポパーはなぜこのように適切な情勢判断を行うことができたのであろうか。「このような予想をするうえで、ユダヤ人問題に対する私の評価が大きな役割を演じた」⁽¹⁶⁾と述べていることからわかるように、反ユダヤ主義の度合が判断の目安になったのである。ポパーは同化主義者ではあるが、自分がユダヤ人とみなされていることを自覚していた。ナチス政権に反対し、

倫理的判断に基づいてドイツから亡命した非ユダヤ系ドイツ人も、知識人の中には多くいることは確かであるが、ポパーは選択の余地なく亡命したのである。このことは、「私はユダヤ人の生まれであったから、移住を決意したのである」⁽¹⁷⁾と述べていることからわかるであろう。ポパーは、ユダヤ的状况、いわばユダヤ人の「運命共同体」(Schicksalsgemeinschaft)の中に投げ込まれていたのである⁽¹⁸⁾。

ナチズムの悪夢は去った。現在ポパーが住んでいるイギリスでは、下層の労働者階層の間には依然ユダヤ人に対する偏見が根強いけれども、政治的反ユダヤ主義の傾向はみられない。しかし、いつ反ユダヤ主義の嵐が襲ってくるかわからないのである。そこで、社会や政治の微妙な変化を敏感に察知して、社会が悪い方向に向かっていかないよう絶えず警戒していなければならないのである。ポパーの社会分析や批判が鋭いのも、ユダヤ人のおかれている不安定な状況からきているのかもしれない。

また、イスラエル建国以後も世界各国に離散して住んでいる圧倒的多数のユダヤ人は、イスラエル国の出現によって新たに「二重の忠誠」の問題に直面した。そこで、自分の住んでいる国に同化しようとするユダヤ人は、イスラエルやユダヤ教など、ありとあらゆるユダヤ的なものから手を切ろうとする傾向になる。しかし、ユダヤ的なものを排除しようとすればするほど、自分がユダヤ人であることを意識してしまうという逆に直面する。ポパーも自分の好むと好まざるとにかかわらず、離散ユダヤ人(Diaspora)としての運命を背負っていることを自覚しており、ユダヤ人であることに対して「わだかまり」をもっている⁽¹⁹⁾。

たまたまユダヤ人に生まれたばかりに差別や迫害を受け、それから逃れるために完全に同化しようとしているポパーの意に反して、どうしてポパーのユダヤ性を強調するのかと反問されるかもしれない。それは、離散ユダヤ人の同化主義者によくみられるように、ポパーによるユダヤ教やユダヤ民族に対する評価が公正さを欠いているからである。ポパーのユダヤ人についての発言は、ユダヤ人の同化主義者に典型的な発言であり、ユダヤ人に対する嫌悪に基づいており⁽²⁰⁾、ユダヤ人に対する偏見を助長するものであるから、それは適切に批判がなされる必要がある。以下、その批判を試みながら、健全な民族主義の行方を模索してみることにした。

ポパーの哲学を特徴づけるものに、多元主義(Pluralism)がある。この多元主義は、三世界説⁽²¹⁾や仮説の多元主義(複数主義)⁽²²⁾にあらわれているが、そればかりではなく、ポパーは社会にも適用している。ポパーは、人間の社会を、多くの蚊が集まって作られる蚊の社会——蚊柱——と対比させて次のように述べている⁽²³⁾。

〔蚊の中に哲学者がいるとして、その〕哲学者の蚊は、蚊の社会は想像しうるもっとも平等主義的で自由な、民主的な社会であるから、偉大な社会であり、少なくとも良き社会であると主張するかもしれない、と私は考える。しかしながら、『開かれた社会』についての書物の著者として、私は蚊の社会が開かれた社会であることを否定するであろう。なぜなら開かれた社会の特徴の1つは、民主的統治形態を別にすれば、結社の自由を大切にすること、それどころか異なった意見と信念とを保持する自由な部分社会を保護し奨励しさえすることである。しかし、すべての道理をわきまえた蚊なら、自分たちの社会にこの種の多元主義が欠けていることを認めざるをえないであろう。

ポパーはコスモポリタン(Cosmopolite)であるが、一元主義的普遍主義(Monistic Universalism)——例えば、あらゆる人がキリスト教徒に改宗しているキリスト教社会を理想とするような考え——ではなく、多元主義的普遍主義(Pluralistic Universalism)を唱えている。

ポパーは、民族自決 (National Self-determination) に基づく民族国家の原理は現実には実行不可能であるとして排除するが、その代わりとして民族「保護主義」(Protectionism) を提唱している。ポパーはいう。「人種の少数集団はどこにでもいる。目ざすべき妥当な目的は、かれらのすべてを「解放」することではありえず、かれらのすべてを保護することではなければならない」⁽²⁴⁾と。

ところが、ポパーはこの民族保護原理をユダヤ人には適用しようとしないのである⁽²⁵⁾。それどころか、ユダヤ民族を「開かれた社会の敵」、歴史法則主義者、人種主義者ときめつけ、非難するのである。

ポパーの保護主義が首尾一貫していないことを、テルアビブ大学のマルセロ・ダスカルは次のように指摘している⁽²⁶⁾。

ユダヤ人の場合を考察してみることにしよう。何世代にもわたって世界の諸民族の中に離散してきたユダヤ人の一部は、「部族的」つながりを解消し、「一般社会」の中に統合されるように試みたが、多くのユダヤ人は、民族的、文化的きずなに基づく民族国家樹立のみが、かれらの個人としての自由を保護するという要件を保証するという結論に到達したのである。…部族主義や民族主義の、ある種の正当性はポパーの保護主義から引き出される。少なくとも、イスラエル国がユダヤ人の保護に貢献しているかどうかという問題は、合理的に議論可能である。ところが、ポパーはトインビーと結託して、「特にパレスチナにおいて古代語を再生しようとする民族主義者の試み」を一方向的に弾劾するのである。

ポパーは知識人であり、西欧社会で成功した少数の幸運なユダヤ人の1人である。われわれ日本人は、ユダヤ人というとアインシュタイン、フロイト、フッサール、ベルグソンなどを思い浮かべるが、かれらは一握りの成功者であり、その優秀な頭脳によって、いうなればどこにでも暮らしていける人々なのである。ポパーは、ニュージーランドからもイギリスからも講師として招聘された。もしポパーが中学校の平凡な一教師だったとしたら、果たしてうまく亡命できたかどうか、はなはだ疑問である。ナチの犠牲になったか、あるいは九死に一生をえて、パレスチナに向かったかであろう。圧倒的多数のユダヤ人は、危機が迫りつつあることを感知しつつも、どこにも行き場がなかったのである⁽²⁷⁾。かれらにとっては、事態は今にきっと良くなると楽観的な期待をするしかなかったのである。ポパーが述べる理想は高邁である。しかし、彼の言動は一般民衆に対する配慮が欠けているのではないか⁽²⁸⁾。

個々人が、ある民族、階級に属していることは端的に事実である⁽²⁹⁾。ポパーはコスモポリタンのつもりでいるようであるが、普遍言語を話すとか、どの民族にも階級にも属さない、抽象的な人間というものは存在しないのである。ただ、民族至上主義や階級闘争至上主義が、個々人の自由を奪う危険性をはらんでいるから、それらには警戒しなければならないのである。民族保護問題も、経済上の平等の問題も、個々人の自由を公平に最適にするためにはどのような政策をとったらよいかという観点から問わなければならないであろう。そこでわれわれは、民族主義に区別を設ける必要がある。ヒトラーのドイツ民族主義を典型とする民族主義は、「全体主義的民族主義」(Totalitarian Nationalism) と呼ぶことにし、個人の自由を保護するために唱えられる民族主義は、「個人主義的民族主義」(Individualistic Nationalism) と呼ぶことにしよう。

ポパーはあらゆる民族主義を一まとめにし、しかも人種主義と並置して、悪だと決めつけるが、ポパーの哲学からは、ダスカルの指摘の通り、この結論は生じえない。ポパーの反対する民族主義は前者であって、後者ではありえない。民族主義を一切否定することによって、民族問題に目を塞いでいるポパーには、あらゆる問題について批判的検討、議論を行おうとする「批判的合理

主義」の態度が、この問題に関しては欠如しているように思われる⁽³⁰⁾。

「民族」という概念は、集団を表わすものであり、民族主義が個人から自由や権利を奪い、義務や服従のみを押しつける方向に傾きやすいことは歴史をみれば明らかであるように思われる。先に、民族主義を全体主義的民族主義と個人主義的民族主義に分けたが、言葉の上では分けることができても、実際の民族集団を観察した場合には、純粋な全体主義的民族集団も純粋な個人主義的民族集団も存在せず、存在するのは、より全体主義的かあるいはより個人主義的な民族集団である。

現在もなお、世界において民族間の対立、闘争は絶えることなく続いている。ポパーのように、「あらゆる民族主義は悪である」と弾劾するだけでは、何の解決にもなりえない。諸民族が、その民族主義を全体主義的なものから個人主義的なものへと、内部において改革していくことが必要であろう。

それでは、一民族の中でどういう政策をとれば、全体主義化を防ぐことができ、しかもよりいっそう個人主義的な民族集団を形成することができるであろうか。これは重要な問いであり、各民族の成員がそれぞれの主義名分を一方向的に支持することなく、「批判的合理主義」の精神にのっとり取り組むべき問題である。その解決策が見つければ、それを制度化することによって、個人主義的民族主義を確固たる現実のものとすることができるであろう。この問題を十分に検討することは今後の課題として残されることになるが、現在なしうる範囲で、その暫定的提案をいくつか述べることによって本稿のしめくくりとしたい。

- (1) 基本的人権、特に生存権の絶対的保証である。個人の生死を国家に預けることになってしまう徴兵制は断固排除し、志願兵制にのみ限定すべきである。イスラエルでは、男女共に徴兵制が適用されているが、これがイスラエルを国家主義的な傾向にする原因となっている。この点では、現在徴兵制を採用していない日本は、より個人主義的であるといえよう。
- (2) 民族に属する成員が、その民族集団の外でも生活できるような教育をすべきである。最適の条件は、好都合な状況にのみ適応するように個体のもつ可変性を限定することによってではなく、逆に外界の変化、不都合な状況にも適応できるように、個体にできる限り可変性を具えさせておくことによって満たされる。この観点からみると、日本の外国語教育は再考の余地がある。万一、国がなくなったら、多くの日本人にとっては海外で暮らしていくことは非常に困難であろう。そういう人々は当然、国家主義的になるであろう。その他に選択の余地がないからである。日本語しか操れないように教育されている日本人は、日本でしか生きていけないように仕上げられている。自己の生存を大幅に国家に頼らせるようにし向ける教育は、全体主義化の危険性をはらんでいるといえよう。そのような社会では、ひとたび戦争が起きた場合、批判や異議の申し立てが、反逆者、国賊ととり違えられる可能性が大きくなる。したがって、全体主義的民族主義の国家は、防衛戦争ではなく、国防の名を借りた侵略戦争を行う危険性が高いといえよう。

ほとんど死語だったヘブライ語をイスラエル建国後再生し、ヘブライ語教育に国をあげて力を注いでいるイスラエルは、他方、外国語教育の重要性も看過しておらず、小学校2年生から、しかも話し言葉を中心とする外国語教育を導入している。

- (3) ポパーリアンの1人であるG. ラドニツキーは、次のような興味深い発言をしている⁽³¹⁾。「理想的なのは、各国家がそれぞれ国民獲得の競争をすることでしょう。それは西側にあっても役に立つことでしょう。なぜならそうすると国々がもっと努力して、人々がそれぞれ勝手に故郷として選ぶ国の魅力を高めようと努力するからです」と。

各人に国を選択する自由を保証し、奨励せよというラドニツキーの案は、民族主義を個人主

義的にすることにも役に立つであろう。

- (4) 多民族国家はいうまでもなく、どんな民族国家にも少数民族は存在する。その少数民族の処遇の仕方は、その国家が全体主義的か個人主義的かを測るうえでのおおきな目安となりうる。したがって、少数者や弱者の意見に耳を傾け、絶えず自戒することは有意義であろう⁽³²⁾。

注

- (1) 「民族」という言葉は多義的で曖昧であるが、ここでは初めから定義をするという方法はとらず、考察を進めていく中で、できるだけ明確にしていきたいと思う。
- (2) 「自由」と「平等」という価値の相互の関係の考察については、拙稿「ポパーと社会主義」、『哲学・思想論叢』第3号、1985年1月、(筑波大学哲学・思想学会)を参照されたい。
- (3) K.R. Popper, *Intellectual Autobiography*, in *The Philosophy of Karl Popper*, ed. by P.A. Schilpp, La Salle, Illinois, 1974, p.90. 傍点筆者。
- (4) ヒトラーの率いる民族社会主義ドイツ労働党の思想は、ナチズムと呼ばれ、イタリアのファシズムと区別されるが、ここではその厳密な区別を行わず、民族がすべてであり、個人はそれに全面的に奉仕すべきであるとする全体主義を意味するものとして、ナチズム、ファシズムを相互に変換可能な概念として用いている。
- (5) K.R. Popper, *The Open Society and Its Enemies*, Routledge & Kegan Paul, London, 1973, Vol. II, Chaps.18-20. この具体的な分析は注(2)にあげた拙稿で行った。
- (6) 現在、西欧の主要な政党で、反ユダヤ主義を綱領に盛り込んでいる政党はないし、もしそれを掲げたとしても、それによって得票が増えるということもないであろう。政治的な反ユダヤ主義は去ったといえよう。しかし最近のネオ・ナチズムの動きからもわかるように、けっして消滅したわけではない。ただ潜んでいるだけかもしれない。ジャーヴィが指摘するように、「合理的批判的議論の伝統は失われやすいのに対し、人種差別の伝統は、それらを破壊しようとしているのに存続する」からである。I.C. Jarvie, *Concepts and Society*, Routledge & Kegan Paul, London, 1972, p.155.
- (7) Joseph Fraenkel, Introduction, in *The Jews of Austria: Essays on their Life, History and Destruction*, London, 1967, p. xi.
- (8) アドルフ・ヒトラー、『わが闘争』、平野一郎、将積茂共訳、角川文庫、上、149-187頁。ルエーガーとシュエネラーについては、ショースキが、ヘルツルとも対比させながら、詳細に分析している。Carl E. Schorske, *Fin-de-siècle Vienna: Politics and Culture*, Vintage Books, New York, 1981, pp. 116-180.
- (9) ヒトラー、『わが闘争』、上、22頁。
- (10) この観点からみると、ユダヤ人がドイツ民族国家実現を妨げる敵に映ったのである。多民族の帝国というハプスブルクの理念を奉じた唯一の民族集団がユダヤ人であったからである。ユダヤ民族集団の中には、宗教的なユダヤ人、民族主義的なユダヤ人、同化主義的なユダヤ人など多種多様な主義主張をもつユダヤ人が存在するが、かれらにとってもっとも生活しやすい社会が、自由主義的で、コスモポリタンの多民族国家なのである。
- (11) ヒトラーについては、『わが闘争』から、ポパーについては、*Autobiography*と*Open Society*から引用した。アモス・エロンは、『ヘルツル』の中で、ヘルツルとヒトラーをまさに対照的な人物として取り上げている。ヘルツルはシオニストで、ポパーは反シオニストであるが、その点を除けば両者の政治に関する思想は類似している。Amos Elon, *Herzl*, London, 1975, p.8.
- (12) Popper, *Open Society*, p.151.

- (13) Popper, *Autobiography*, p.83. 傍点筆者。
- (14) *Ibid.*, p.83.
- (15) アラン・ウンターマンはユダヤ人という概念を作り上げているカテゴリーとして、(1)生物学的出自、(2)宗教的帰属、(3)コミュニティ・文化集団への帰属、(4)人種的、国家的帰属と使用言語、の4つを挙げているが、私は(5)として、社会学的カテゴリーを付け加えるべきだと考えている。なぜなら、ユダヤ教にもユダヤの文化にも関心がなく、イスラエル国にも共感しないにもかかわらず、他人から自分はユダヤ人であるとみなされており、万一悲劇的な事態の際にはユダヤ人と運命を共にすることを余儀なくされるであろうということを意識しているユダヤ人が存在するからである。一般に「同化主義者」(Assimilationists)と呼ばれる人々が、このカテゴリーに属するであろう。この社会学的カテゴリーは、ウンターマンのいう(1)生物学的出自とは意味を異にすることに注意すべきである。というのは、全くユダヤ人ではなかったにもかかわらず、ユダヤ人とみなされたためにユダヤ人と運命を共にした非ユダヤ人が存在したからである。アラン・ウンターマン、『ユダヤ人——その信仰と生活』、石川耕一郎・市川裕訳、筑摩書房、19-27頁。
- (16) Popper. *Autobiography*, p.83.
- (17) K.R. Popper, *On Reason & the Open Society*, in *Encounter*, 38, No. 5. 1972, p.14.
- (18) 同化主義者のユダヤ人は、改宗や非ユダヤ人との結婚などによって、何代かたばユダヤ人意識は全くなくなり、あえて歴史や家系をたどることをしない限り、同化してしまうであろう。しかし、同化主義者と同化した者とは違うのである。ポパーは、ユダヤ教にも、ユダヤ民族主義——イスラエル建国以前にはユダヤ民族国家の建設を目標に掲げ、建国後はそれを支持する「シオニズム」と、多民族国家内でユダヤ民族の自治権獲得を旨とする「離散民族主義」とに分かれる——にも反対しているが、自分自身がユダヤ人であることは自他共に認めている。そして、西欧社会において、ユダヤ人であるということはその人に非常に大きな影響を及ぼすのである。
- (19) B. マギーが著書、『カール・ポパー』の草稿で、ポパーを「ユダヤ人哲学者」と述べたことに対し、ポパーに、害はあっても利なしといわれて、「ユダヤ人」を削除したという経緯を、テルアビブ大学の哲学科講師のメナヘム・フィッシュから聞いた。また、イスラエル、ヴァン・リール研究所のナタン・ローテンシュトライト教授によると、再三再四の招待にもかかわらず、ポパーはイスラエル訪問を拒否し続けているという。もしこれが別の国からの招待であったら喜んで応じるのではなかろうか。日本に来たように。
- (20) クルト・レヴィンは、「ユダヤ人の間に自己嫌悪があることは、非ユダヤ人には信じ難いであろうが、ユダヤ人自身の間ではよく知られた事実である」と指摘して、ユダヤ人の自己嫌悪の原因とその解決法を考察している。Kurt Lewin, *Self-hatred Among Jews*, in *Contemporary Jewish Record*, Vol. IV, No.3. 1941, pp.219-232.
- (21) K.R. Popper, *Objective Knowledge*, Oxford, 1972, pp.153-161.
- (22) *Ibid.*, pp.241-244.
- (23) *Ibid.*, p.209.
- (24) K.R. Popper, *Conjectures and Refutations*, Routledge & Kegan Paul, 1963, p.368. 原文イタリック。
- (25) 同化主義者のユダヤ人が、ユダヤ人が民族集団であることを認めようとはせず、民族自治権を与えようとしなない態度は、よく見られることなのである。マルクス主義の立場から初めて民族問題に取り組み、『民族問題と社会民主主義』(Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, Wien, 1907)を著わしたオットー・パウアーによると、民族は共通の領土に住む人々というより、「運命共同体」(Schicksalsgemeinschaft) から生ずる「性格共同体」(Charaktergemeinschaft) の成員として定義

されるという。すなわち、共通の運命から特殊な性格が形成された共同体に結びつけられている人々の集団が民族である。もしこれが民族の定義ならば、ユダヤ人ほど民族と呼ばれるにふさわしい民族は他にいないであろう。およそ2000年前に祖国を失い、離散した後も世界各地で、民族的、宗教的共同体として存続してきたのがユダヤ人だからである。ところがポパーは、ユダヤ人の場合には、共通の定住地をもっていないとしてその民族性を否定し、民族自治権を与えようとしないのである。これはまさに自己矛盾であるといえよう。この分析については、Robert Wistrich, *Socialism and the Jews*, London, 1982, pp.332-348を参照した。

- (26) Marcelo Dascal, *Closed Society ← Open Society → Abstract Society*, in *Wittgenstein, the Vienna Circle and Critical Rationalism*, Vienna, 1979, p.367.
- (27) このユダヤ人の危機的状況が実際に訪れる前にそれを察知して、ユダヤ人国家の建設を訴えたのがヘルツルであった。
- (28) 注(24)で言及した *Socialism and the Jews* の著者であるヘブライ大学ユダヤ史学科のロバート・ウィストリッチは、筆者との私的な会話の中で、ポパーの「ユダヤ人問題」の見方には、一般のユダヤ人の行動はなるほど理解できないことはないが、私はそれをとらないという、一段高い所から見おろす態度がみられ、エリート意識があらわれていると分析した。
- (29) この言明は、マルクス主義の「階級」闘争理論を支持しているというわけではなく、もし個人を「階級」的見地からみたら、どこかに所属するであろうという事実を指摘しているだけである。
- (30) ポパーは、『伝統の合理的理論に向けて』という論文を書いているが、同じ精神で、『民族の合理的理論に向けて』という論文が書かれる必要があるのではなかろうか。ポパーは、18世紀の啓蒙主義者、合理主義者が伝統を無視していると批判しているが、民族問題を無視するポパーは、この点では18世紀流のコスモポリタニズムに近いといえよう。
- (31) F. クロイツァー編、『未来は開かれている』、辻理訳、思索社、177頁。
- (32) 本稿は、日本イスラエル大使館主催の『エッセイ・コンテスト』（1987年6月）に入賞した論文に加筆、修正したものである。